

はじめに

解剖学の講義といえば、ひたすら黒板を用いた板書である。私自身が師匠から受け継ぎ、そしてその師匠もそのまた師匠から、脈々と受け継がれてきた伝承の技。解剖学の

講義は、いわば職人技である。体を構成する生体組織の絵を何色ものチョークを使い、1色の黒板（実際は緑）を鮮やかに、そして最後には黒板ごと一つの作品のように仕上げるのだ。いかなれば、これは教育現場の伝統芸といっても過言ではない。しかし、果たしてこれが現在の学生が生体構造を学ぶのに最も適した方法なのだろうか？ 学生の主体的な学習時間を増やすよう、教育現場では取り組みがなされているいま、一方的な板書の講義が現代に合った最適な授業法といえるのか？ 伝承を当然のように受け継ぎ守ろうとする一方で、時代とともに変化する環境にあつて、このジレンマに悩んできた。そのような中で、私大連のFD研修に参加しヒントを得たことにより、私の講義は螺旋的に次のステップに進むことができたと自負している。この話題を興味深く思っ

私の授業実践

教育現場の最前線から

古典的講義からの脱却

北原 秀治

●東京女子医科大学医学部講師

くださる方が果たしてどれだけあるだろうか。やや不安な気持ちを抱きながらではあるが、開き直って健忘録として綴ってみたいと思う。

1 手で書くのが一番なのか

私の学生時代（ちなみに、私は現在も他大学の博士課程で学生という身分でもある）、20 + α 年以上前、パソコンもパワーポイントも、およそ講義デバイス的なものは一切なかった。あるものといえば、教員があらかじめ用意したノートをOHPを使ってスクリーンに投影するくらいであった。フェルトペンを使う白板もほとんどなく、黒板とチョークによる講義が主流だったと思う。しかしながら、黒板に板書する量が多い教員ほど学生には人氣がなく、字が小さかったり雑であると、特に大きい教室では視力のよくない学生（私も含め）はよく見えず、手に小さな双眼鏡を持ちながら、友人のノートを書き写したりと、講義を受けるのに非常に苦労したものである。しかし、不思議とその時代には、それが悪い授業だと思つたことは一度も無く、これは講義というものが教員が一

方的に情報を与える場であるというのが常識であり、そしてそれに対して特段の違和感もなく問題視されることなどない時代だったからであろう。

現在の私の講義は、パワーポイント、プリント（レジュメ）、黒板、これら3種の神器（？）を用いて行うことが多い。特に心がけている点は、パワーポイントには文字はなるべく入れず、視覚的情報として取り入れやすくするために絵や写真だけを用いるようにしている。使用する画像は、教科書から取り込んだものもあるし、ネット上で利用できるものを使ったり（出典を明記して）、自分で撮った写真を用いることもある。この資料は、例えば140分（70分×2コマ）の講義であれば、1枚2〜3分の計算で、40〜50枚ほどを作る。これを学生のレベルに合わせて変更する。専門外の学生を対象とした講義では、1枚の説明時間を短くし、全体の枚数を多くする。これは、専門であれば一つの画像から得られる情報も多いが、専門外の人は1枚のスライドが長いと退屈するからである。次に配付するプリント（レジュメ）であるが、これはパワーポイントの内容をそのまま印刷することは（印刷用に一枚に数枚のスライドを入れる機能があり、作成者の負担が少ない）行わないようにしている。もちろん、

ん、時には学生からの要望もあるが、できるだけ教科書などから集約した詳細な内容を、自分の経験知識を付け加えながら、A4判の用紙で数枚の古典的なプリントを作成し、それに沿った流れで講義を行い、パワーポイントの視覚的な説明をインプットしながら深く学習理解できるようにしている。さらに、プリントには所々にメモを書き込むスペースも設けてある。講義に、決まった教科書は必要ない。1冊の教科書で科目を縛ると知識が偏ると思われるので、講義用のプリントに加えて、学生自身が図書館などを利用したり気に入った本を購入するなど、複数の教科書を参考にしてみようとしている。

そして最後に、伝統芸である板書の出番である。前述の内容に加えて、あらゆる色を使って、躍動感を持って大胆に、大きな図を描く。説明は先に済ませているので復習にもなるし、実際に手を動かすことで記憶に働かせる。以上の方法では、板書のみ講義に比べて、学生がひたすら手を動かすだけの時間が短くなり、メリハリもつくためか、学生からの不満はいまのところ出ていない。ちなみにパワーポイント使用時は、神器の恩恵にあやかっ、機能として搭載されているペンやハイライト機能を使い、スライド内にアンダーラインを入れたり

もしている。

このようなスタンスに至るまでには、講義が終わるごとに学生から感想を集めて回った。

「①講義ツールがパワーポイントだけの場合」「②プリント配付だけの場合」「③板書の場合」に対して、学生の感想は以下のとおりであった。

- ① パワーポイントだけで140分講義を行った場合、多くの学生が楽な授業だったと感じるが、最終的に要点が分からず、眠い授業であると感じた。
- ② 配付プリントだけを用いて講義を進めた場合、もしくは穴埋め形式のプリントを用いて講義を進めた場合、少しは理解しやすくなるものの、やはり眠くなるようだ。また穴埋め形式は聞き逃した場合に正解が分からないまま終わることも多いので、正解をどこか別なところで照合できるようにするという一手間が教員側にも要求される。また、プリントだけでなくと老眼の教員にはかなりつらい（私も含めて）。
- ③ 黒板（もしくは白板）に板書だけの場合は、「実際にノートに書いて覚えるのは書くのが面倒」、「板書が読みづらくて疲れる」、しかし「最も記憶に働きかける手段であり、かつ授業中眠くなりにくい」との

ことであった。授業中に眠ってしまったのは書くのを諦めたとき（量が多過ぎるとか、文字などが小さくて見えないとか）とのこと。

これらをまとめた結果、パワーポイントを見ながら講義を聞き、その合間に詳細資料としてプリントを読みながら、自分の手を動かして書く、つまり、「見る読む書く」という「視覚・聴覚・触覚」の三つの感覚を刺激しつつ学習する形式が良好との結論に至った。

蛇足だが、照明を暗くすると脳内物質であるメラトニン（眠くなる物質）の分泌が促されるので、ある程度の明るさのある場所で交感神経（興奮する神経）を優位にしないと、学生のやる気も出てこないと考えている。

2 講義はプレゼンテーション

米国に留学してハーバード行政大学院や医科大学院のオープン講義などを受けた際に、教員が学生の前に立ち、何も資料を持たずに（学生は教科書やPCなどを見ながら）、学生を直視しながら対話形式で授業を進めていくという米国で一般的なスタイルが面白いと思った。教員は、教えるに当たって完全な知識、つまり専門分野のみならず、間接的に関わるような知識までも要求され、学生

もかなりの予習をして講義に臨んで来る。このスタイルはさながら紀元前哲学者の弁論のようであり、古典的かつ最も難しい講義形態であり（教員側学生側ともに）、個人的にはこうした講義を実施したいという憧れもあるが、実際には講義を行う環境や学生の質（こうしたスタイルの学習方法に慣れているか否か）、教員の人気など、いろいろな要素が大きく影響してくるので、日本でこれをそのまま行うのは容易なことではない。実は、私なりにこの「紀元前哲学者の弁論スタイル」の講義に何度か挑戦したことがある。その結果、準備段階から費やす膨大な労力、また学生が修得できた内容が納得いくものではなかったりと、決して成功といえるものではなかった。ただ、ポイントは同じで、資料は見ない、学生と対面で話すプレゼンテーションのように行うことは大事だと思いい、現在も実践していることである。板書時に講義は行わない。描き終わってから改めて学生の方を見て話を始める。これらは、以前、学生から、黒板に向かって講義をしているようだと言われたことがあり、それ以来注意している点である。

話が脱線してしまっただが、次に講義の組み立て方についてご説明する。

3 講義の構成（解剖学編）

(1) 講義の流れ

実際の講義の組み立て方であるが、導入、総論、各論の順を追って述べてみたい。解剖学の特徴として、専門用語がひたすら羅列される科目なので、導入はとにかく分かりやすく、ポイントになるだろう。まず専門用語を分かりやすい一般の言葉に置き換え、日常生活に直接結びつくような「問い」を学生に投げかける。例えば「この言葉を聞いた時にすぐに思い浮かべるものは？」でもいいし、「この言葉が付く病気の名前を知っているか？」でも良い。答える学生がいけない時は、そのまま自分で答える。これは学生が言葉に慣れることにも一役買っている。

また、日常の話題を講義のキーワードと関連付けて、講義の内容に盛り込む。自分が持っている知識と新しい知識を融合することによって、記憶の固定をたやすくするのにも役立つ。

このように、導入部分は「分かりやすい」、「問いかけ」、「日常生活」もしくは少しの「笑い」と直結した形になるよう常に心がけている。Ice Breakとして自身の経験を話すことも、導入としては可能であると考える。ただしここで注意しなければならないのは、最初の「問

い」が講義終了後に「答え」として出ているかどうかである。教員も人間であるので、最初の目的を忘れてしまうこともあり、学生にボールを投げたまま講義を終わってしまわないよう、常に注意しなければならない。

次に、導入が無事に終わり、学問的な総論を説明し終えたら各論へと進んでいくが、その際に、話を深く掘り下げる時は、必ず「ここから先は内容が深くなります」などの一言を付け加える。覚えるべきところと全て覚える必要はないところの線引きを曖昧にせずに伝えるようにすること。そして、理解しにくい箇所は、一見すると直接の関係はないように思える豆知識を補足として付け加えるなどの一手間を惜しまない。

(2) 講義の時間配分

時間配分についても、あらかじめ細かなタイムスケジュールを決めておく。例えば、導入5分、総論10分、各論30分、板書20分、まとめ5分といった形である（70分講義の場合）。事前にリハーサルを数回行うなど、70分講義の場合は常にその3〜5倍の時間を準備に充てる。教員が陥りやすい点としては、準備時間が長過ぎるとモチベーションが下がることや、繰り返し機械的内容に

なってしまう講義がつまらなくなる点などが挙げられ、気を付けたいところである。

また、講義は予定時間に終わるのではなく、最低でも2〜3分は早く終わらせること。質問や後片付けの時間を残しておくことも重要である。よく、終了時間ギリギリ、または超過してまで講義をする教員がいるが、それは準備不足の結果として起こるものであって、決められた時間以外、教員が学生の時間を搾取してはならない。チャイムとともに教室を出られるよう調整することも仕事のひとつといえるだろう。

4 古典的講義VSデジタルデバイス

古典的講義と現代のデジタルデバイスを使った講義では、どちらが実際の学習効果が高いのだろうか。講義に関するさまざまな研究報告を見ると、学生の読み書きに紙やペンを使う場合と、デジタルデバイスを使う場合を比較しているものがある。ここでは、紙やペンを使うことは触覚（触れる、握るなど）に関して有用な影響があり、筆記スキルを上げること重要な役割を担っているという。一方、デジタルデバイスは、キーボードを使うスキルの向上や、自動修正機能やマルチタスク機能によ

る学習の効率化に有用であると結論づけている。どちら
がいいかは各教育機関の状況（環境）や国の教育方針で
変わってくると思うが、やはりこれらをハイブリッドさ
せた教育法が必要であると考えられる。巷には多様な意
見や教育論があふれているが、自信を持つていえるのは、
講義とは教員が学生に与える影響が非常に大きいもので
あるということ。優秀な学生を生み出すのも教員の存在
が重要であることを最後に述べて終わりたいと思う。本
稿が若手教員の授業運営のヒントとなれば幸いである。



時代の要請に応えるリベラルアーツ教育

1 新しいリベラルアーツ

立命館大学は2019年度、新しくグローバル教養学部を設置した。グローバル化が進み、変化の速度の速まった今日の社会において、教養（リベラルアーツ）の重要性がうたわれてすでに久しい。しかしそこである「教養」の中身はしばしば曖昧だ。私たちは、自らが掲げる「教養」の意義を国内的文脈と国際的文脈の双方において、新しく定義し直すところからこの新学部を構想した。

国内的文脈において、「教養」の理解をもっとも妨げているのは、専門教育と対置された、かつての「パンキョー（一般教養）」のイメージだ。本来、教養は専門知と対立するものではない。むしろ専門知をよりよく

山下 範久 ● 立命館大学グローバル教養学部副学部長、教授

生かす力を涵養するものだ。学部教育で身に付けた専門知で一生食えることができた時代は、すでに遠い過去である。己の専門知のベースを常に更新するだけではなく、これまでとは異なるより広い文脈で専門知の生かしどころを発見・創造する力が、専門知を持つ者にこそ求められる。グローバル教養学部のカリキュラムは、この知を生かす文脈への感性を高めることに狙いを定め、三つの柱を建てた。

第一の柱はコスモポリタンスタディーズ。学生は、文化研究を軸に、地域研究、芸術学、メディア論などを通じて、世界の多様性を学ぶ。第二の柱はシヴィリゼーションスタディーズ。ここでは歴史学を軸に、人類社会の進化の経路の多系性を学ぶ。二つの柱から、学生は空間軸と時間軸の両方において、社会がどれほ

ど異なるかたちをとりうるかということを学ぶことになる。これらを踏まえて第三の柱となるイノベーショナルスタディーズでは、経営理論と科学技術社会論を軸に、脳科学や情報学、デザイン学などの学びを組み合わせ、技術による社会課題の解決の実践感覚を養う。三つの柱による学びを通じて、学生は専門知をオルタナティブな社会の構想力へと結び付ける姿勢と技法を備えた人材となつて社会へと、あるいはより深い専門知の世界へと羽ばたいていく。

他方、国際的文脈では、リベラルアーツはエリート教育の伝統のなかに位置付けられている。その淵源はヨーロッパの古典の教養にあり、近代の大学において内容を変えながらもヨーロッパ中心主義的な知的枠組みのなかで展開してきた。しかしリベラルアーツの理想が、己を自由にするための技芸、すなわち己を縛るマインドセットの外に出るための知であるならば、今日における教養は、とりわけヨーロッパの外にある私たちにとつて、まずこのヨーロッパ中心主義を相対化し逆包摂する思考が求められよう。私たちが「グローバル」教養学部を名乗るのは、オールイングリッシュの授業や原則留学必須といった表面的な理由によるも

のではなく、脱ヨーロッパ中心主義を志向してリベラルアーツを目指すがゆえなのである。

2 ANUとのデュアル・ディグリー・プログラム

グローバル教養学部の大きな特色は、学部全体がオー



ストラリア国立大学（ANU）とのデュアル・ディグリー・プログラムを想定して作られていることである。留学を必須とするプログラムは、国内のさまざまな大学ですでに珍しくない。しかし私たちのプログラムは、



特定の一大学とカリキュラム開発のレベルから連携してデュアル・ディグリー・プログラムを設計し、提携先大学から派遣される Program Convener の常駐を受け入れつつ、提携先大学のカリキュラムの必修科目部分を本学キャンパスにおいて展開するものである。ここまで緊密で有機的な協力関係を築いた上でのプログラムを学部定員全体の規模で実施している例は、本邦で他に類をみないと自負している。

また、ANU側で提携のカウンターパートナーとなるのは、国際的に高い名声を誇るコーラル・ベル・スクエアを実施するアジア太平洋学プログラムである。アジアをフィールドとする地域研究の学びが、脱ヨーロッパ中心主義的リベラルアーツを目指すグローバル教養学部の学びと強いシナジーを持つことはいままでもない。100名の入学定員のうち、10名はANUがオーストラリアからリクルートすることになっており、学生ホータのダイバーシティをさらに高める意義も持っている。

3 4 単位科目によるカリキュラム

本邦の大学は、大半の場合において、1科目を2単

位とすること（週1回授業）が普通である。しかし本学部では、1科目を4単位とすること（週2回授業）を原則としてカリキュラムを編成した。これは、単純に単位1科目当たりの学修量を増やすことが目的ではなく、1週間に2回実施される授業の一方を「レクチャー」、もう一方を「チュートリアル」とする基本的な性格付けを行い、前者におけるインプットを後者でアウトプットを通じて学び返すことによつて、より深く、広がりのある学びを実現しようとするものである。チュートリアルはグループワークをファシリテートし、レクチャーとは異なる視点からの学び返しを促すために、ポストドクレベルの人材をチューターとして雇用するという本学としては新しい枠組みも取り入れた。

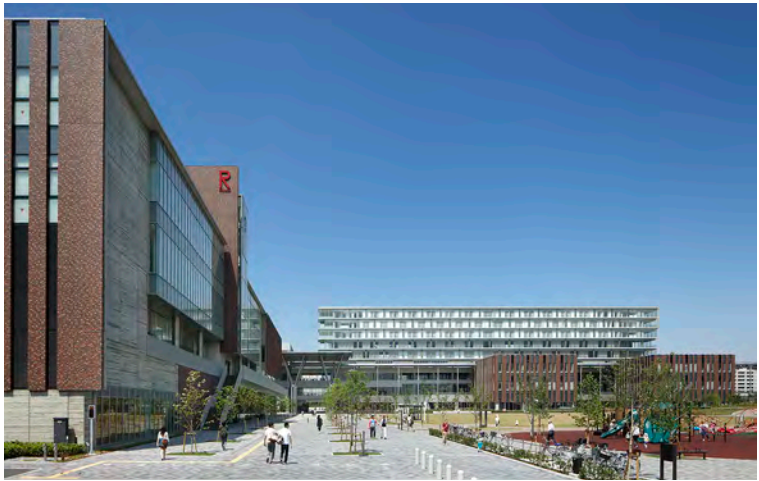
学生は、毎学期この4単位科目を4科目受講登録し、これを学びきることを原則としており、前学期のGPAなどの基準をクリアした上で、特別に認められた場合でなければ、5科目目の4単位科目を履修することはできない。各科目のレクチャーのためのリーディングアサインメントのポリウムやチュートリアルのための授業外のグループワークの量は、この原則を前提に設計されている。

これは、1科目につき1週間に60分授業を3回（レクチャー2回＋チュートリアル1回）実施し、やはり1学期4科目履修を前提としているANUの授業構造とのすり合わせによつて、国際的な有用性の高いカリキュラム構造を実現するものでもある。

このように設計された4単位科目を教員として実際に運用してみても実感することであるが、1科目当たりの学生の学びは、単に（倍の時間の授業があるという）量的な厚みを増すだけではなく、レクチャーにおける学び（learning）とチュートリアルにおける学び返し（unlearning）の往復によつて格段に深みを増す。視点の多元性を謳うリベラルアーツの学びとも親和性が高い。カリキュラム設計に当たつての厳しい科目精選はもとより、時間割、教室確保など、既存のシステムの上に乗り越えるべき実務的課題は多かつたが、努力しがいがあったと感じている。

4 包括的学修支援

1学期当たり四つの4単位科目の履修を基本とすれば、4年間で取得できる総単位は、少数の集中科目などを履修する機会を除けば、単純計算で128単位で



あり、卒業要件である124単位をわずかに1科目分超えるだけである。逆にいえば、各学期に履修登録した四つの科目を確実に学びきらなければ、4年間での

卒業は難しいということになる。そこで必要となるのが包括的な学修支援、すなわち学生が4年間を見据えた学びのゴールを意識して各学期の履修計画を立てられるようアシストし、学期中には学びの不安やつまずきに対して臨機に適切な支援をする機能である。このためグローバル教養学部では、やはり本学初めての試みとして、学部独自に常設の学修支援室を設置した。

学修支援室は教学担当副学部長を室長、学生主事を室長代理とし、3名の助教を室員として配置している。支援室業務を担当するために、学修支援に専門性を持つ職員も学部事務室に配置された。

学修支援室は、本学部における学修支援のハブではあるが、もちろん学修支援の機能を独占的に引き受けるものではなく、学生にとって学修支援の唯一の窓口というわけでもない。

学生は、例えば特定の科目の中で学びにつまずきを感じれば、まず担当教員に相談するだろう。履修制度の理解に不安があれば、事務室を訪れることもできる。

大学全体が実施する支援としての障害学生支援室や学生サポートルーム、保健センターなどの部署ももちろんある。学修支援室が提供するのは、グローバル教養

学部での学びの理念と構造を良く知る立場から、これらの多元的な学修支援の提供主体の連携のハブとなることである。学修支援室は各科目の担当教員と連携して、支援の必要な学生にプロアクティブにアプローチする一方、学生の視点からは困りごとがあるときだけではなく、より積極的に学びたい学生に対しても相談のワンストップとしての看板を掲げ、学生のニーズに応じた支援の提供先へと連絡し、連携して支援することによって、そのミッションを果たそうとしている。

5 学び続ける力

専門知の更新速度が加速する現代にあつて、リベラルアーツの学びは、究極的には学生が卒業後も、生涯にわたつて、己が向き合う社会的課題に応じて創造的に学び続ける力の基盤を養うことを目的とするものである。そのためには、4年間の学びの一つひとつのステップにおいて、学生が能動的に学ぶ姿勢をいかに引き出し、それを育んでいくかにグローバル教養学部での教育の成否がかかっているといつてよい。

本学部の開設後、日々生じる課題を乗り越えながら、ようやく最初の1年を終えようとしている。まだ立ち

上がったばかりではありながら、私たちが送り出す学生が創り出す未来の世界を想うとき、学部もまた日々学び続け、進化に開かれていなければならない。



わが 大学史の 一場面

日本の近代化と
大学の歴史

キャンパスの変遷と学生の多様化

浅沼 薫奈 ● 大東文化大学東洋研究所特任講師、大東文化歴史資料館専任研究員

はじめに

大学における自校史教育や自校教育という試みが近年すっかり定着するなか、本学でも2006年度から自校史教育に相当する講義を全学共通科目として開講している。授業の根幹に大東文化大学の歩みを据えつつ、近代日本における大学の成り立ちと大学規模の量的拡大過程とを理解した後、学生像の変容と大学の大衆化、現代の「大学問題」「大学改革」までを学ぶ。入学時にはまだ抽象的存在であった「大学」についてさまざまな側面から学習し、身近で具体的なものとして捉えられるようになることが目標である。受講生数は年によって増減が見られるものの、例年約120名程度の履修登録がなされている。

さて、この講義のなかで、ひときわ学生の興味を引くのは、キャンパスの変遷の回である。本学の創設は1923（大正12）年9月20日である。同年9月1日に起きた関東大震災の影響で実際の授業開始は翌年1月までずれ込んだが、震災直後の9月20日に公的な設立認可を受けたことから、今日までこの創立記念日は揺るがないものとなっている。校舎の位置も、予定していた校舎建物が震災によって全焼してしまったため、急きよ、九段下の靖国神社の近くにあった法政大学の古校舎を使用することとなった。その後の多くの変遷については本文で記述するが、本学のキャンパス史はエピソードに溢れている。実はそれだけでなく、キャンパスの変遷は多くの場合、社会背景や世相、大学史に深く関わっているので、「キャンパスの百年史」を辿ることは非常に深い学びに

ながるのである。

2018年11月に中央教育審議会から出された「2040年にむけた高等教育のグランドデザイン(答申)」において、わが国の高等教育が目指すべき方向性の一つとして、地域のニーズに応える、高等教育機関の強みを生かした連携・統合が掲げられた。「地域連携」「地方創生」は現代の大学運営に関する重要なキーワードの一つであり、板橋区と東松山市とに基盤キャンパスを持つ本学に課せられた重点課題でもある。近年、各大学におけるキャンパスのあり方はますます多様化が進み、大学キャンパスは各大学の特色を社会に提示しうるものとなっている。大学の個性を生かすための多彩な取り組みを実現することが必須であり、キャンパス全体を用いた工夫と検討が繰り返されている。また、同窓生が大学を振り返るとき、キャンパスの立地、建物それ自体が原風景となることを考えれば、長期的に見てもその存在の大きさは計り知れないものである。キャンパス設計は大学運営そのものかもしれない。

では、現在の本学のキャンパスはというと、前述のように変遷を重ねた結果として、ややコンパクトな「板橋校舎」と広大な「東松山校舎」の二つの基盤キャンパス

を有する形となっている。100年ほど前に「九段下」「飯田橋」の駅からほど近い都心部に校舎を得て誕生しながら、紆余曲折を経て現在の形になった。発祥地を学園本部などの校地として残す私学が多々見られるのに対して、現在の本学はそこに小さな石碑を置いているだけである。また、全国的に顕著な、いわゆる「都心回帰」も現在まで行われていない。そして、そのこと自体が「大東らしさ」ともいえるのである。

1 大東文化学院の誕生と九段校舎

本学の前身は「大東文化学院」といい、1923(大正12)年9月20日に設立認可を受けた旧制専門学校である。大正期に活発化した「漢学振興運動」を背景としつつ、「東亜固有の文化を振興」するため「皇道及び国体に醇化した儒教」を中心とした漢学教育を行うことを目的とした学校であった。大正10年から同12年にかけて帝国議会衆議院本会議に提出された「漢学振興ニ関スル建議案」が可決されたことによって、国庫補助を全面的に受けて創設された。設立母体は「財団法人大東文化協会」であり、同協会初代会頭には鉄道大臣などを歴任した大木遠吉が、また大東文化学院初代総長には司法大臣など



開校当初の九段校舎

を務めたあとに第35代内閣総理大臣となる平沼騏一郎が就任した。

さて、創立時の大東文化学院の位置は、麹町区富士見町6丁目16番地であった。当初、

1923(大正12)

年8月の設立申請時には校地を神田区錦町としていたが、同年9月1日

に起きた関東大震災によって開校予定だった校舎が全壊したため、位置変更届が出されたのである。都内中心部で被災を免れ、かつ相当の校舎を探すのは困難だったと思われるが、幸いにして9月15日には新校舎への位置変更届が提出された。新たに決まった校舎は、九段下にあった法政大学旧校舎の一棟であり、木造2階建ての小さな建物で、講堂と五つの教室に小さな図書閲覧室と道場が

あるだけの簡素な造りだった。それでも、真っ白な外壁を梧桐(青桐)が囲み、靖国神社のすぐそばに位置する緑豊かで閑静な校地は、当時の学生街であった神田にも近く、勉学に励むのに適した場所であった。殊に校舎の周りの梧桐(青桐)は印象深く、1930(昭和5)年頃に児玉花外によって作詞された、大東生をうたった「学生歌」でも「靖国神社を囲みつつ」「梧桐の高窓青年の」と詠まれている。現在も「青桐」は本学の校章のモチーフとして親しまれており、漢字教育で知られる大学附属幼稚園の名称も「青桐幼稚園」である。

本学は、1941(昭和16)年2月に池袋へ移転するまでの17年余りをこの九段校舎で過ごした。創設当初の定員は1学年わずかに50名程度、国庫補助を受けていたことから学費無料で教科書も全て支給されるうえ、給費制度を完備していたこともあって、定員に比して入学希望者は相当地に多かった。しかも、講義を行う講師陣は帝国大学や早稲田大学などで教授を務めた一流の学者たちであった。昭和初期の大不況の時期を越え、ファシズムが次第に台頭する不穏な社会情勢であったが、難関試験を突破した大東生たちは同地で肅々と漢学を学び続けたのである。

2 戦時下体制のなかの池袋校舎

創設から10数年が経つ頃、昭和初期の世相の変化とともに国からの補助金が断たれたこともあり、学内では漢学一辺倒ではなく学問専攻の広がりが求められるようになっていた。そこで専門領域を拡大して入学定員を増やし、修身漢文科・国語漢文科・東亜政経科からなる3部制を導入することとなった。このうち、大陸指向が強まっていた世相を反映し、アジア地域研究を行うことを目的とする東亜政経科への入学希望者が特に多かつたことから、学生数は創設時の約4倍へと急増した。その結果、池袋3丁目に新たな校地を得て、1941（昭和16）年2月に移転することとなった。立教大学のすぐ隣に位置した移転先は、やはり木造2階建ての古校舎1棟のみであったが、教室数も格段に増え、運動施設も充実したものであった。

しかし、池袋校舎への移転からほどなく、日本は総力戦体制へと進んでいくこととなる。戦況の悪化とともに、学徒出陣や学徒動員などにより、学生は満足に学問研究を享受することができない時代となっていく。さらに1945（昭和20）年4月の東京川崎空襲により、池袋校

舎は全焼。ごく一部の貴重な漢籍や資料は学生の尽力によつて事前に疎開していたが、学内に残っていた書籍類は校舎と共に全て焼失してしまい、実質的に学園としての機能は失われてしまった。戦禍の激化とともに疎開者も増えており、東京に残っていた少数の学生や研究者たちは当時の総長であった酒井忠正邸に集い、敗戦を迎えたのであった。

戦後、酒井邸は復員や疎開先から帰京した学生によつて活気にあふれたが、GHQによつてほどなく接収されることとなった。そこで、池袋校舎再建までの約3年半の期間を過ごしたのが、葛飾区青砥町の川沿いにあった工場と工具寮の跡地



戦後の仮校舎・青砥校舎



再建された池袋校舎

を利用した「青砥校舎」であった。仮校舎での日々は、戦後の物資不足もあって施設設備は劣悪、雨が降れば通学路は中川の堤防を越えた泥水であふれかえるような環境だった。電気の使用は極端に制限され、食事もサツマイモが出ればよいほうで、配給制とはいえ従来は家畜の飼料だったトウモロコシや脱脂大豆の粉だけの日もあった。しかし、停電の合間に暗い電球の下で書物を開き、空腹を忘れるかのごとく議論を交わし、新しく来る時代を語り合う大東生の姿が見られたのが青砥校舎の時代であった。

こうした敗戦後の混乱期を経て、本学も1949（昭和24）年5月から文政学部1学部のみの新制大学として、

新たな歩みを進めることとなった。しかし、同年10月に開校した念願の池袋校舎の新たな各施設も大学設置基準には遠く及ばないものであり、敷地面積をはじめ図書などの設備も不完全な状態での再スタートであった。

3 高度経済成長と板橋校舎

1960（昭和35）年、理事会によって「少数精鋭から多角精鋭へ」とのスローガンが掲げられ、文政学部を文学部と経済学部に分離し、同時に校地拡大が提案されたことを受けて、1961（昭和36）年8月、池袋校舎から板橋校舎への移転が行われた。新校地となった現・板橋区高島平は、当時、東京都による土地区画整理事業が開始された土地であった。1970年



三田線西台駅から見える板橋校舎



上空からの板橋校舎

代に高島平団地として入居が開始されるが、新しく建設された校舎の周囲にはまだ建物らしきものはほとんどなく、1968（昭和43）年に開通する都営地下鉄三田線西台駅からは、板橋校舎の全景を遮るものなく見ることができるともいえる。この高島平団地の発展とともに、1960年代から70年代にかけて本学は急速に拡大していくこととなる。量的拡大を果たすと同時に質的にも多

様化し、大きな変革期を迎えることとなった。

1960年代は、大学キャンパスの郊外移転が他の大学でも次々に見られるようになった時代である。後述するように、本学も板橋校舎への移転からほどなく、埼玉県東

松山市に広大なキャンパスを開校する。当時、都市部への人口および産業の集中を防ぐ目的で「工場等制限法」が1959（昭和34）年に成立し、首都圏における大学新設や増設は制限の対象となった。一方、高度経済成長による産業界の発展によって、大卒人材の需要が急増すると同時に進学率は一気に高まりを見せていた。敗戦後のベビーブーム世代が大学進学年齢となったこともあって、私立大学を中心に郊外に広大なキャンパスを新設し、定員を超える「水増し入学」を行ってこれらの進学希望者を受け入れていった。その結果、私学は史上最大の膨張期を迎えることとなる。大学進学率も、1962（昭和37）年の10%から1968（昭和43）年には20%を超えるまでになっていた。トロウ・モデル（段階的移行論）によれば、エリート段階からマス段階へと移行したのが同時期である。1960年代末には大学解体・大学紛争を引き起こしつつ、本学を含む大学生像は急激に変容していった。

4 スポーツの隆盛と東松山校舎

東松山校舎は、1967（昭和42）年4月に利用が開始された。その広大な校地は、埼玉県東松山市の丘陵地



上空からの東松山校舎

帯に位置する。

もともと国有林野であったものが学校用地として払い下げられ、本学のキャンパスとして利用することとなったのである。郊外型のキャンパスの利点は、いうまでもなく広大で自然が多い点にある。

る。当時は、都心は誘惑が多いので勉学に身を入れるには郊外が良いという考えもあった。それに加えて、丘陵地帯に得た広大な敷地を持つ東松山キャンパスは、健全で良質な学習・生活環境と、心身の健康の維持を学生に提供した。高度経済成長を経た日本社会の好景気を背景にしつつ、爆発的に増えた学生を受け入れるために、1・2年生の「教養部」として開校した東松山校舎であった

が、これは一方で「スポーツの大東」誕生の起爆剤ともなった。キャンパスの開校と同時に埼玉県体育協会の協力を得つつ、運動部を統合し「大東体育部」「大東文化大 学学生自治会体育連合会」を設立し、大東スポーツの強固にして確固たる基盤が形成されたのである。広いグラウンドと最新の設備を持つ東松山校舎は、国際舞台で活躍する優秀な選手育成に一役買うこととなった。

同時に、学部の増設も進んだ。創立50周年を迎えた1973（昭和48）年には、外国語学部と法学部を加えて4学部9学科となり、その後、国際関係学部、経営学部、環境創造学部、スポーツ健康科学部、2018（平成30）年には社会学部が創設され、現在は8学部20学科、学生数も約1万2千人を擁する規模となった。文系中心の学問体系は多様性に富み、高い国際性を持ちつつも地域社会や国内への理解を重視した、地に足のついた教育研究が展開されている。

おわりに

その後の本学におけるキャンパス整備についても触れておこう。

創立50周年には板橋キャンパスに複合施設となる50周

年記念講堂を建設し、創立60周年には東松山校舎に記念図書館の建設などが行われた。さらに、2003（平成15）年に迎えた創立80周年の記念事業として大規模に行われたのが、板橋キャンパスの再開発であった。「エコキャンパス」「人と環境にやさしい都市型キャンパス」を掲げて整備事業が展開され、「学生が交流し、文化が交流する」キャンパスを目指した。キャンパス中央には、新たな図書館を含む開放的なデザインの複合施設が建設されたほか、校地のいたるところに太陽光パネルや風力発電、屋上緑地などを設置し、当時最先端の「エコ」技術を最大限に取り入れた都市型キャンパス整備が進められた。創立90周年を迎えた2013（平成25）年前後は、東松山キャンパスの整備に着手した。この整備事業は、2011（平成23）年の東日本大震災の影響で工事の一部が中止となったものの、「交流」をテーマとして国際的交わりをイメージする新施設が、広大なキャンパスの中に複数建設された。

現在も、2023年の100周年に向けて校舎校地に関する新事業計画が進行中である。東松山校舎から約2.5キロの位置にある「緑山キャンパス」の再整備も、2022年供用を目指して進められている。東松山キャン

パスの機能と多彩な活動が文化や自然と交わり高めあうこと、緑山キャンパスのスポーツ施設をさらに拡充させる地域創生を先導する拠点とすることによって、選手のための練習環境を適宜整えるとともに、社会貢献を目指し地域連携施設としての活用が強化されるよう準備を進めている。

2000年代に入る前後から、首都圏大学の都心回帰が話題になったが、今日まで本学は回帰していない。利便性の良いキャンパスを持つメリットと引き換えにしても、郊外に広大で環境の良いキャンパスを持ち続ける意義は大きい。本学創設地である九段下や池袋に校地を残すことなく、常に新たな校地を求め、それぞれの地域特性とともに歩み続けてきたのである。大学にとって、地域との連携は重要な側面を持つ。郊外型の大学は地域との繋がりを持ちやすく、また大学の教育研究成果を地域に還元しやすい。板橋校舎と高島平団地、東松山校舎とこども動物自然公園など、本学にとっても地域との繋がりは大切であり、社会貢献は大学の重要な使命である。大学キャンパスの立地と環境の利点を生かし、それがこれからの多様性社会の中で生きる学生の成長に繋がれたいと願うものである。